

仮設での冬支度 急ぐ

7カ月を過ぎた避難生活で、初めて寝込んだ沙也加さん。10月下旬には体調も持ち直し、学校にも通い始めたが、幸さんはあらためて家族の体が心配になった。思えば、光一さんも新しい職場で悪戦苦闘している。「自宅から通っていた郵便局より、はるかに忙しそう」と幸さん。仕事

は同じ窓口業務だが、会津地方には塙さん一家と同様に原発周辺から避難してきた人々が増えた。貯金や保険など、避難生活を続けるための用事が多いのか、対応しきれないほどのお客がやってくるという。会津の寒い冬への準備にも追われる。仮設住宅には、もうこたつを用意し、オイルヒーターも買ってきた。「狭いので、なるべく薄型のにしました」と幸さん。そうするうちに、原発3km圏内住民の2

原発1kmからの避難
いつの日か

—21—

回目の一時帰宅が始まったが、一家は参加を見送ることにした。「高い放射線量も怖いし、生活に忙しいし」。何より、前回の帰宅時に痛感した「もう自宅には戻れないだろう」という思いが腰を重くさせる。いやがうえにも、前を見て暮らさなくてはならない一家。「そういえば最近、仮設住宅をノックする人が増えた」。ドアを開くと見知らぬ男性たちが立っているが、自身の名前と町の今後を熱く繰り返す口調か

ら、すぐに用件は分かる。震災後初の大熊町長選と町議選が、11月に控えているのだ。

【(はなわ)さん一家】 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生。